

刻翻『故事部類抄』(八)

——曲亭叢書——

曲亭叢書研究会

凡例

一 本稿は、早稲田大学中央図書館「曲亭叢書」所収の、曲亭馬琴自筆『故事部類抄』(イ4 600 51~55)五卷五冊を翻刻するものである。

一 今回は第四冊の後半、「穀菜部」・「材木部」・「菓実部」・「花卉部」・「歌舞曲部」・「楽器部」を翻刻した。

一 翻刻にあたっては、できるだけ底本通りとすることを原則にしたが、便宜上、以下の諸点に手を加えた。

1 漢字は、原則として新字体を用いた。誤字・当て字などはそのままにし、(ママ)と注し補記した。ただし、印刷の都合上省略したところもある。

2 踊字の「と」などは、仮名は「ゝ」、漢字は「々」に統一した。

送り仮名のうち、次の文字は以下のごとく表記した。「㇏」↓コト、「ノ」↓シテ、「㇏」↓トモ、「子」↓ネ。

3 句点・読点・中黒などは、底本には原則として施されていないが、適宜補った。例外的なものは「・」で示した。連続符「一」は省略した。例、「如何」↓「如何」。

4 濁点・見セ消子など、明らかな誤記は訂正した。

- 5 本文中の二三行割部は、へゝの中に示した。
- 6 送り仮名とルビは、字間を調整して区別できるように配慮したが、印刷の都合上必ずしも厳密なものとはなっていない。
- 7 出典原文を省略したと思われる部分については、数文字程度のもものは訓点を含めて（ ）の中に適宜補い、長文にわたる場合、〔中略〕記号で示した。
- 8 書名、部立ての下に補った（ ）部は、翻刻者の注である。例、「〔後補表紙の書題箋〕」。
- 9 本文中の年号表記など、明らかな誤りと思われるものは、※を施し、各項末尾に注した。
- 10 欄外書入れ・貼紙などは、*をもってその位置を示し、適当と思われるところへ挿入した。
- 11 『日本書紀』に関しては、日本古典文学大系本に依拠して異同を示した。その他は解題にゆずる。

曲亭叢書研究会

柴田光彦
谷協理史
雲英末雄
播本眞一
二又淳
小澤笑理子

穀菜部

材木部

菓実部

花卉部 (元表紙二十)

五穀 婚姻

軻遇突智娶^{アヒテハニ} 埴山姫^ニ、生^{ムワカムスヒヲ} 稚産靈^ニ。此神頭上^{ヲノニナレリ}、生^ニ 蚕^ニ 与^レ 桑^ニ。臍^{ホソノカニ} 中^ニ (生^ニ 五^ニ 穀^ニ) (日本書紀)

* 蚕桑臍 (欄上に朱筆)

五穀

天照大神、復遣^{マタマシテノ} 天熊人^ヲ 往^テ 看^ミ 之^ヲ。是^ノ 時^ニ、保食神実^ニ 已^ニ 死^ニ 矣^リ。唯^シ 有^ニ 其神^ノ 之^ニ 頂^ニ、化^ナ 爲^レ 牛馬^ニ。顧^{ヒタヒノヘニ} 上^ニ 生^ニ 粟^ニ。眉^ノ 上^ニ 生^ニ 璽^ニ。眼^ノ 中^ニ 生^ニ 稗^ニ。腹^ノ 中^ニ 生^ニ 稻^ニ。陰^ニ 生^ニ 麦^ニ 及^ニ 大豆^ニ。天熊人^ノ 悉^ク 取^リ 持^チ 去^リ 而^テ 奉^ル 進^ム 之^ヲ。于^レ 時^ニ、天照大神喜^テ 之^ヲ、是^ノ 物^ノ 者[、] 則^{ウツシキ} 顯^キ 見^ル。蒼^ニ 生^ニ、可^キ 食^{ヒテ} 而^テ 活^ク 之^ヲ也^ニ。乃^チ 以^テ 三粟^ノ 稗^ヲ 麦^ヲ 豆^ヲ、爲^ス 陸田^{ハタツモノト} 種子^ノ。以^テ 稻^ヲ 爲^ス 水田^ヲ 種子^ノ。又^モ 因^テ 定^ム 天邑^{ムノムラキミヲ} 君^ヲ。即^チ 以^テ 三其稻^{イネタネヲ} 種^ヲ、始^テ 殖^{ウフ} 于^ニ 天狹田^{サナタ}

翻刻「故事部類抄」(八)——曲亭叢書——

及^カ 長田^ヲ。其^ノ 秋^{タリホ} 垂^{ツカラニ} 穎^ニ、八握^ナ 莫^ナ 々^ナ 然^ナ、甚^ナ 快^{タコ、ロコシ} 然^ニ。日本紀

稻 入(三城門)

垂仁(天皇) 五年冬十月、天皇命^{ミコトノリシテ} 上毛野君^ノ 遠祖^ツ 八網田^ヲ、令^ニ 擊^ツ 狹穗彦^ヲ。時^ニ (狹) 穗彦興^{シテ} 師^ヲ 距^ク 之^ヲ。忽^ニ 積^テ 稻^ヲ 作^ル 城^{キヲ}。其^ノ 堅^{コト} 不^レ 可^レ 破^ク。此^ヲ 謂^フ 稻城^{イナキ} 也^ニ。日本紀

稻

天智(天皇) 三年十二月、淡海国言^ス、坂田郡^ノ 人^{シノタノフビト} 小竹田史^ニ 身^ム 之^ガ 猪槽^ニ 水^ノ 中^ニ、忽^ニ 然^ニ 稻^{タリム} 生^テ。身^ヲ 取^リ 而^テ 収^メ、日^ニ 々^ニ 致^ス 富^ニ。栗^ニ 太^ノ 郡^ノ 人^{イフキノスクリナキホカニシキツマシキキノハシニ} 磐城村主^ニ 殷^ニ 之^ニ 新^ニ 婦^ニ 床^ニ 席^ニ 頭^ニ 端^ニ、一^ニ 宿^ニ 之^ニ 間^ニ、稻^ニ 生^テ 而^テ 穗^ニ。其^ノ 旦^ニ 垂^テ 穎^ニ 而^テ 熟^ニ。明^ニ 日^ニ 之^ニ 夜^ニ、更^ニ 生^ニ 三^ニ 穗^ニ。一^ニ 新^ニ 婦^ニ 出^テ 庭^ニ。兩^{ツノ} 箇^ニ 鑰^{カギ} 匙^ニ、自^レ 天^ニ 落^ル 前^ニ。婦^ニ 取^リ 而^テ 与^ル 殷^{ナオカニ}。々^ニ 得^{タリ} 二^ニ 始^ニ 富^ヲ。日本紀

嘉禾

天武(天皇) 八年十二月丁未朔戊申、由^ニ 嘉禾^{トモニ}、以^テ 親王^{シヌルツミ} 諸^ク 王^ヲ、諸^ク 臣^ヲ 及^ニ 百^ニ 官^ニ 人^ヲ 等^ヲ、給^ル 禄^ニ 各^ニ 有^レ 差^ニ。大^シ 辟^ル 罪^ヲ 以^テ 下^ニ 悉^ク 赦^ス 之^ヲ。是^ノ 年^ノ、〔中略〕因^テ 播^ル 国^ニ 貢^ル 瑞^ニ 稻^ヲ。每^ニ 稔^ニ 有^レ 枝^{マタ}。

日本紀

○持統(天皇) 六年八月癸亥朔、〔中略〕癸丑[※]、伊勢国司
献^三嘉禾二本。〃 持統紀

※六年九月癸丑

ひら茸 前後身ニモ入ヘシ

これも今ハむかし、丹波国篠村といふところに、年比、
平茸やるかたもなくおほかりけり。里村のもの、これを
とりて人にもこゝろさし、又われもくひなとして、とし

ころすくるほとに、その里にとりてむねとあるもの、ゆ
めに、かしらおつかミなる法師ともの、二三十人はかり
いてきて、申へきこと、いひけれハ、いかなる人そとと
ふに、この法師はらハ、とし比もミやつかひよくして候
つるか、此さとの縁つきて、いまハよそへまかり候なん
ずることの、かつハあハれにも候。またことのよしを申
さてハと思ひて、此よしを申也といふと見て、打おとろ
きて、こハ何ことそと、妻や子などにかたるほとに、又
その里の人の夢にも、この定に見えたりとて、あまた同
様にかたれハ、心もえでとしもくれぬ。さて次のとし九

十月にもなりぬるに、さきぐいてくるほとなれハ、山
に入て茸をもとむるに、すべて蔬おほかた見えず。いか
なる事にかと、里国の者思ひてすぐるほとに、故仲胤僧
都と(て)、説法ならひなき人いましけり。この事を聞て、
こハいかに。不浄説法する法師ハ、平茸にむまる、とい
ふことのある物をと、の給ひてけり。されハ、いかに
もく、平茸ハくハさらにことかくましき物とそ。

宇治拾遺(物語)

麦 人事恩ノ部ニアリ

○筍

ヨモツシコメ オヒト、ムル
泉津醜女追^二留^一 伊奘諾尊^ヲ、時伊奘諾尊^ヲ、又投^{ナケ}湯津爪^ヲ
櫛^ヲ。此^レ即^チ化^ナ成^ル筍^{タカシナト}。醜女以^テ拔^キ瞰^{ハム}之^ヲ。神代卷

草木

天照大神之子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、〔中略〕欲^{オホス}
立^テ皇孫天津彦々火瓊々杵尊、以^{ヒコ}為^ニ葦原中国之主^{キミ}。
然^{モツ}彼^ノ地^ニ多^{ハニ}有^{サハ}螢^{ヘナ}火^ス光^{アシキ}神、及^サ蠅^ハ声^{ヘナ}邪^ス神。復^タ有^{キミ}二草^ノ
木^ク威^ク能^ク言^ク語^ク。日本紀

松 人事ノ旅ノ部ニモ入ベシ

実方の中将、奥州へなかせられし時、当国の名所あこやの松をミんとて、国の内をたつねまはるに、もとめかねてすてにむなしう帰らんとしけるか、道にてある老翁に行あたり、中将、や、御へんハふるい人とこそ見れ。当国の名所あこやの松と云所やしりたるとふに、まつたく国の内にハ候ハす、出羽の国にぞ候らんと申けれハ、さてハ汝もしらさりけり。今ハ世すゑになりて、国の名所をも、はや皆よび失ひけるにこそとて、すてに過んとし給へハ、かの老おう中将の袖をひかへて、あハれ君ハ、ミちのくのあこ屋の松の木かくれて出へき月の出もやらぬか、といふ歌の心をもつて、当国の名所あこやの松とハ御たつね候か。それハ昔兩國が一國なりし時、よミ侍りし歌也。十二郡さきわけて後ハ、出羽の国にぞ候らんと申けれハ、さらハとて、実方の中将も出羽の国へこへてこそ、あこやの松(を)ハ見てけれ。平家物語

棗

翻刻「故事部類抄」(八)——曲亭叢書——

貞信公、棗を愛し給ひけり。式部卿親王の家に、よき棗の木ありけり。其木をおろし枝にせられて、手つからみつから、花山院の北対の西の妻戸の庭前に植給ひけり。これによりて、其木左右なき名木にていまだあり。花山院太政大臣の三位の中将のとき、法性寺殿摂政にて、六条坊門烏丸の御亭より土御門の内裏へまゐらせ給ふにハ、近衛東の洞院ハ便路なれば、尤此大路をこそとほらせ給ふへきに、いかにもよけさせ給ひけり。おのつから、此大路を過させ給ふとてハ、東洞院の西の四足をハ過て、其棟門のまへにてハ御車の簾をおろされ〔中略〕けり。人あやしみて、その子細をたつね申けれハ、時の摂政、三位、中将をうやまふにハあらず。(彼)亭に貞信公の、まさしくてつから植給へる名木あり。かれに礼をいたす也。此事京極大殿、つふさにしめし給ふ旨分明也、と仰られける。古今著聞集

蒲萄

伊奘諾尊〔中略〕入^{リマシテ}於^{ヨモツクニ、}黄津^{ニ、}〔中略〕而〔急〕走^{ニケカ}廻

婦^{ヘリ玉フ}（于）時、伊奘冉尊恨^テ曰、何^ソ不^ル用^ニ要^言、令^三吾^{ニハ}恥辱^{チミセマストノ玉ヒテ}。乃^{マタシテヨモツシコメヤヒトヲ}遣^ニ泉津醜女八人、一^ニ云、泉津日狭女^ニ追^テ留^メ之^ヲ。故伊奘諾尊、拔^テ劍^ヲ背^ニ揮^キ、以^テ逃^ク矣。因^テ投^{玉フ}黑鬘^{キミカツラ}。此^レ即^ニ化^ル成^ニ蒲陶^{ルエビトシコメ}。醜女^テ見^テ而採^リ噉^{ハム}之^ヲ。

桃実

日本紀

伊奘諾尊、欲^{オホシテ}見^{ント}其妹^{イロトラ}、乃^{イマヌソノヲ}到^ニ殯斂^ニ之處^ニ。是時、伊奘冉尊、猶如^{ニシテイケリシトキ}生^ニ平^ニ、出^テ迎^ニ共語^ニ。已^{ニシテカタリテ}而謂^ニ伊奘諾尊^ニ曰、云云^{シカク}。言訖^{コト}、忽然^ニ不^レ見^ヘ。于^レ時聞^シ也。伊奘諾尊、乃^{トホシテヒトツ}拳^ニ一^ニ片^ニ之火^{ミツナハス}而視^ニ之^ニ。時伊奘（冉）尊、脹^ハ滿^レ太^タ高^{ヘリ}。上^ニ有^{ヤクサノイカツチ}八^ニ色^ニ雷^ニ公^ニ。伊奘諾尊、驚^テ而走^ニ還^ニ。是時、雷等皆起^ニ追^ヒ來^ニ。時道^ニ辺^ニ有^{ナル}大^ニ桃^ノ樹^ニ。故伊奘諾尊、隱^{レテ}其^ノ樹^ノ下^ニ、因^テ採^テ其^ノ実^ヲ、以^テ擲^{ナケシカハ}雷^ニ者^ニ、雷等皆退走^シ矣^{キヌ}。此^レ用^{ヲフセク}桃^ノ避^シ鬼^ノ之^{コト}縁^ノ也^{モト}。日本紀異說

○伊奘諾尊、逃^{ニケテ}到^{マストキニ}黃泉津平坂^ニ、則^ニ立^{シテ}隱^レ桃^ノ樹^ニ。林^ニ採^テ其^ノ桃^ノ三^ツ箇^ヲ、待^{テウチ玉ヘハ}擊^ク者^ニ、雷等悉^ク逃^シ還^ス矣^{シカク}。云云。

伊奘（冉）尊、勅^{ミコトノリシテ}桃子^{ノミ}曰、汝^{イマシ}如^ク助^{シカ}吾^ヲ、於^ニ葦

原^ノ中^ツ國^ニ、所^{アラフル}有^ク顯^シ見^キ蒼^{アヲヒトクサ}生^テ之^ニ落^テ苦^キ瀨^セ而患^ニ惱^ニ之^ニ時^ニ、可^{シト玉ヒテ}助^ヲ苦^ヲ而賜^テ名^ヲ曰^フ意富迦牟都父美命^ト。

椎子

（先代）旧事本紀及古事記

欽明天皇五年、佐渡嶋^ノ東^{ウムノサト}禹武邑^ノ人^ニ、採^ヒ拾^{ロヒテ}椎子^{シヒマ}、為^ス欲^ニ熟^ニ喫^シ。著^ニ灰^ニ裏^ニ炮^ニ。其^カ皮^ハ甲^ハ化^ニ成^ニ二^ノ人^ニ、飛^ヒ騰^ル火^ノ上^ニ、一^ニ尺^ニ余^ニ許^ニ。經^テ時^ヲ相^ヲ闘^フ。邑^ノ人^ノ深^ク以^テ為^ニ異^{シト}、取^{ケハ}置^ニ於^ニ庭^ニ、亦^ニ如^レ前^ニ飛^テ、相^{フコト}闘^ニ不^レ已^ニ。有^レ人占^{ヘテ}云、是^ニ邑^ノ人^ノ、必^ス為^ニ魘^ニ所^ニ迷^{マヨハサ}惑^シ。不^レ久^ニ如^シ言^ヲ。

日本紀

桃李

推古天皇二十四年春正月、桃李^{ミナレリ}実^ニ之^ニ。日本紀

瓜

推古天皇二十五年夏六月、出雲國言^ス於^ニ神戶郡^ニ有^レ瓜^ニ大^サ如^{ホトキノ}缶^ノ。是^ノ歲^ニ、五^ノ穀^ノ登^{タナツモノミノレリ}之^ニ。日本紀

桃李

天武（天皇）九年春正月、撰津國言^{イクタノ}、活田村桃李^{レリ}実^ニ也。

上^ニ、登^三菟田山^ノ、便見^{ルニ}紫^ノ菌挺[、]雪而生^{タリ}。高六寸余。
滿^リ四町許^ニ。乃使^テ童子^ヲ採[、]取還^テ示^ス隣家^ニ。捻言^フ、不^レ知^{。且疑^タ毒物[。]}於是[、]押坂直与^ニ童子[、]煮而食^フ之。
大有^ニ氣味[。]明日往[、]見[、]都^レ不在焉[。]押坂直与^ニ童子[、]因^テ喫^ニ菌羹[、]無^シ病而寿[。]或^{（人）}云、蓋俗^{シクニヒト}
不^レ知^ニ芝草[、]而忘^{（ママ）}言^ニ菌耶[。]日本紀皇極紀

百合

百合

皇極天皇三年夏六月癸卯朔、大伴馬飼連、献^ル百合^ノ華[。]
其莖長^{クキサキ}八寸^{（ママ）}。其本異^{ニシテ}而未連^{アヘリ}。日本紀

芝草

天武（天皇）八年、紀伊国伊刀郡貢^ル芝草[。]其状似^{タケニ}菌[。]
莖長^{モトノ}一尺、其蓋^{イタ、キ}二圃[。]日本紀

桜

成範の卿を、桜町の中納言と申ける事ハ、すぐれて心ず
き給へる人にて、常ハよしの山をこひつゝ、町に桜をう
へならへ、其内に屋をたて、住給ひしかハ、来る年の春

ことに、見る人桜町とそ申ける。桜ハさいて七か日にち
るを、なこり（を）をしミ、天照大神にいのり申されけ
れハにや、三七日まで名残有けり。君もけん王にてまし
ませハ、神も神徳をか、やかし、花も心ありけれハ、廿
日のよハひをたもちけり。平家物語

梅

承元五年閏正月九日云。自^ニ永福寺边^ニ被^レ移^ニ殖梅樹^一
本於御所北面[。]（是）北野廟庭種也。非^ニ濃香之絶妙[。]南
枝有^ニ鶯^ノ栖[、]依^レ之被^レ賞^ニ翫^之。東鑑

優曇花

貞応二年七月九日、鎌倉葉師堂谷辺、有^ニ独[、]住僧[、]号^ニ淨
密[。]於^ニ件坊前庭^ニ優曇花開散之由風聞。鎌倉中男女為^レ
觀^レ之成群。自^ニ三品政子^ニ遣^ニ遠藤左近将監[、]為^レ後被^レ
見^レ之処[、]芭蕉花之由申^レ之。東鑑

茶靡花

小倉の家に住侍る比、雨のふり侍ける日、蓑かる人の侍
りけれハ、山吹の枝を折てとらせ侍りけり。心もえて罷

過て、又の日山吹心えさりしよし、いひおこせて侍りける返しに、いひつかはしける。七重八重花ハさけとも山吹のミのひとつたになきそあやしき。兼明親王。

後拾遺(集)

同

色葉集に云。井堤の山吹とハ或説にハ、橘大臣諸兄、井堤寺をつくりて、金堂四面の廻廊のめぐりに山吹をうへて、廊のうちに水をた、へ、花をさかせて水にうつして見るやうをかまへたりけるに、供養の日、おもハざるに讒言をおいてみまかりけれハ、水の花をうつして見ることもなくやミにける事をよめる也。其歌、山城の井堤の玉水手にむすひたのミしかひもなきよ也けり。又曰、一説に云、輕大臣、玉井の光明寺を造りて山吹をうへたりけるが、灯台に、をにつくられし事也といひ伝ふ。諸兄とは僻事也。已上(和歌) 色葉集。

無名抄に云。或人語て云、ことの縁ありて井堤といふ所にまかりて、一宿つかふまつりたること侍き。所の有様、

井堤河の流れたる体、心も及び侍らず。彼井堤の大臣の跡なれハことハリなれど、廻りに立ならひたる石なども十余町ばかり、さのミヤとほくたておきけん、石ごとに、なほさりのこと、ハ見え、わざと立たるやうになん侍りし。そこに古老の者侍しをかたらひて、むかしの事ともたづね侍しついでに、井堤の山吹とて名にながれたるを、いと見え侍らぬハいつくと尋しかハ、さる事侍り。彼井堤の大臣の堂は、ひと、せ焼侍にき。其前におひた、しく大きな山吹、むら／＼みえ侍き。その花のりんハ土盆のおほきさにて、いくへともなくかさなりてなん侍し。それをさやうニ申おきて侍るにや。又彼井堤河のミきハにつきて、隙もなく侍しかハ、花のさかりにハこがねの堤などをつきわたしたらんやうにて、他所にハすくれ侍り。但、下臈のいふかひなく侍る事ハ、かく名高き草とて、それをもおき侍らず、田作るにハ草をいれたるがよくいでくると申て、何ともなく刈とり侍りし程に、今ハ跡もなく成て侍る。已下蛙門ニ見ゆ。

梅子

伝云、永観へ山州愛宕郡禪林寺僧ノ慈仁^{ニシテ} 至^ニ於獄舎^一、
而問飢寒^一。又禪林有^ニ梅樹^一。毎年生^レ子。採^レ之施^ニ藥
王寺病人^一。俗呼名^ニ悲田梅^一。山州名跡志

瞿麦

花山院の池の中島に、もちの木あり。貞保親王、木の下
の岩の上に座し給ひて、つねにふえをふかせ給ひけり。
又四面の築地の上にハ、なてしこをひしと植られたりけ
れば、花のさかりにハ、いろくさまくにて、にしき
を山におほへるに似たり。是によりて花山の号ハ、（あり
と）申ける。まことにや。（古今）著聞集摘要

梅花

菅家、太宰府におほしめしたちけるころ、こちふかハ匂
ひおこせよ梅の花あるしなして春なわすれそ、とよミ
給ひて後、かの紅梅殿の梅の片枝にむかひ給ひて、古郷
の花のもののいふ世なりせハいかにかの事をとはまし、
と詠ぜさせ給ひたりけれハ、彼木 先久於故宅 廢籬於

久年 麋鹿於住所 無主又有^レ花 かく申たりけるこそ、
あさましとも哀れとも詞もおよはね。（古今）著聞集
後拾遺集 世尊寺の桃の花をよめる 出羽弁 古郷
の花のもののいふ世也せハいかにかの事をとハまし 双紙
物語のそら言、かゝること多かり。

桜

禁秘抄曰、南殿、桜、在^ニ紫宸殿、異^ニ角^一。是大略自^ニ草創
樹也。貞観^ニ此樹枯^テ自^ニ根纔^ニ萌^ス。坂上瀧守奏^レ勅守^レ之。
枝葉盛^{ナリ}。徒然草に、吉野の花・左近の桜、皆一重にこそあれ。

橘

右近、橘、遷都已前人家、橘也。康保二年正月廿七日、仰^ニ
左右近衛府、被^ニ移植^一へ禁秘抄。
拾芥抄曰、南殿前庭、橘樹、依^ニ旧跡^一殖^レ之へ見天曆御
記、桜者本是梅也。桓武天皇遷都之日、所^レ被^レ殖也。而
及^ニ承和年^一枯失^ス。仍仁明天皇被^ニ改殖^一樹也。橘本者、橘
大夫之時樹也。枝条不^レ改及^ニ天徳之末^一へ見康和二年御
記

藻塩草に云、左近桜・右近橘の事ハ、桜ハ左大将・左中將・左少將、列をなすなり。又橘ハ右大将・右中將・右少將、列をなす也。陳を列事也。左右のしるしの木也。桜かるれハ、左大将これを植、橘かるれハ、右大将これを植るなり。

柳

延喜式曰、へ巻四十一十五丁へ凡神泉苑廻地十町内、令ニ京職栽^{ツシテ}柳^ヘ。へ町別七株へ

鶯宿梅ノ事 大鏡卷ノハニアリ

瓜

七条朱雀の東西に、鴻臚館と申ところハ、異国の人の参れるとき居る所にてなんさふらひける。〔中略〕村上御日記に、蜜瓜のたねを、鴻臚館のあづかりに給ひて、こころにうへさせられたりとぞ。大槐抄

松

金蓮寺、称ニ四条道場。〔中略〕寺中慶松菴、庭有ニ大松。毎年夏初杜鵑来鳴。普広院義教公枉駕聞之。依号ニ

翻刻「故事部類抄」(八)——曲亭叢書——

杜鵑松。先年為ニ霹靂ニ枯失。雍州府志

梅

誓願寺、堂前有^ニ梅。其花欲^レ開(時)、其色甚紅也。世称^スニ未開紅。春初洛人之奇觀也。雍州府志

西念寺、在上賀茂、南堤下。〔中略〕相伝、西行法師、暫住焉。庭前植^ニ梅愛^ニ翫之。因詠^ニ登迷古(加)志有梅佐加里奈流我宿之歌。爾後謂^ニ此梅^ニ曰^ニ登迷古加志之梅。至今有^ニ殘種。其色淡薄、其香芬芳堪^レ愛。一説、登迷古加志之歌、所題^ニ屏風^ニ梅^ニ画^ニ也。雍州府志 図とめこかし梅さかりなるわか宿をうときも人ハをりにこそよれ、歌は山家集にあり。

歌舞曲部

楽器部 (元表紙二十一)

歌

允恭天皇八年春二月、幸^ニ于藤原。密^{シノヒニミツナハス}察^ニ衣通姫^ノ之

アルカタチ
消息^一。是夕、衣通郎姫、恋^二玉ヲ天皇而独居^リ。其不^レ知^二天皇之臨^一、而歌曰、和餓勢故餓、句倍枳予臂奈利、佐嵯餓泥能、区茂能於虚奈比、虚予^レ比^レ辞流辞毛。天皇聆^二是歌^一、則有^二感^一情、而歌之曰、佐嵯羅餓多、邇之枳能臂毛弘、等枳含氣帝、阿麻多絆泥受迹、多儂比等用能未。明且、天皇見^二井^一、傍^二桜華^一、而歌之曰、波^レ（那）具波辞、佐区羅能梅涅、許等梅涅麼、波柳区波梅涅孺、和我梅豆留古羅。皇后聞之、且大恨也。日本紀

琴曲

雄略天皇十二年、命^二木工鬬鷄^一、御田、始^二起^一樓閣^二。於是、御田登^レ樓、疾^二走^一四方、有^レ若^二飛行^一。時^二（有^二）伊勢采女^一、仰^二觀樓上^一、怪^二彼疾行^一、顚^二仆於庭^一、覆^二所擎饌^一。天皇便疑^二御田奸^一、其采女、自^二念將^一刑、而付^二物部^一。時、秦酒公侍坐、欲^二以^一琴聲^二使^一悟^二（於）天皇^一。横^レ琴彈^二曰、云云。^{（中略）}天皇悟^二琴聲^一、（而）赦^二其罪^一。（日本書紀）

儼

推古天皇二十年、百濟人味摩之婦、化^二曰、学^二于呉^一、得^二伎樂儼^一。則安置^二桜井^一、而集^二少年^一、令^レ習^二伎樂儼^一。於是、真野首弟子・新漢齊文、二人習^レ之、傳^二其儼^一。日本紀

儼

皇極天皇元年、蘇我大臣蝦夷、立^二祖^一、廟於葛城高宮、而為^二八佾之舞^一。遂作歌曰、野麻騰能、飫斯能比稜栖鳴、倭拖羅務騰、阿庸比拖豆矩梨、挙始豆矩羅符母。

日本紀

歌

天武十四年秋九月、詔曰、凡諸歌男・歌女・笛吹者、即伝^二己子孫^一、令^レ習^二歌笛^一。日本紀

琴曲

平家物語、仲国さか野に小督局を訪ふ段に、比ハ八月十日あまりの事なれハ、さしもくまなきそらなれとも、主上ハ御なミたにくもらせ給ひて、人やあるとめされけれ共、御いらへ申者もなし。や、有て、大彈大弼仲国、其

夜も御とのゐに参て、はるかに遠う候けるか、仲国御いらへ申、汝もし、小こうかゆくゑやしりたるやと、仰けれハ、いかでしり参らせ候へきと申。誠や小かうハさかのへんニ、かた折戸とかやししたる内に有と申者のあるぞとよ。あるじか名をハしらずとも、尋て参らせてんやと仰けれハ、仲国主が名をしり候ハでハいかてかたづねあひ参らせ候へきと申けれハ、主上げにもとて、御涙せきあへまします。仲国つく／＼物を案するに、誠や、小督の殿ハ、琴引給ひしぞかし。此月の明さに、君御事思ひ出参らせて、琴引給ハぬ事ハよもあらし。内裏にて琴引給ひし時、仲国ふえのやくめにめされ参らせしかハ、其琴のねハ、いつくにも聞しらんする物を、さかの在家、いく程かあらん、打まハつてたつねんに、などか聞出さで有へきと思ひ、左候ハ、あるしの名ハしらず共、たつね参らせ候へき。たとひ尋あひ参らせて候共、御書など候ハすハ、うハの空とや思召れ候ハんすらん。御書を給て参り候ハんと申けれハ、主上げにもとて、やかて

御書あそはひてそ下されける。寮の御馬にのりてゆけと仰けれハ、仲国、りやうの御馬給て、明月にむちをあげ、西をさしてぞあゆませける。をしか啼、此山里と詠しけん、さかのあたりの秋の比、さこそハあはれにもおほえけめ云々。(中略)かた折戸したる内に琴をそ引^{マヤサ}まされたる、ひかへて是を聞けれハ、少もまかふへうもなく、小かうの殿の爪音也。楽ハ何そと聞けれハ、夫を想てこふとよむ想夫恋といふかく也。仲国されハこそ、君の御事思ひ出参らせて、かくこそおほけれ、この楽を引給ふ事のやさしさよと思ひて、腰よりやうでうぬき出し、ちつとならひて、門をほと／＼とた、けハ、琴をハ引やミ給ひぬ。平家物語

曲 琵琶

木曾誅罰の副將軍、忠度・経政・清房・知度などハ、いまだ近江国塩津・かひ津にひかへ給へり。中にも皇后宮の佐経政ハ、幼少の時より、詩歌管弦の道に長し給へる人にておハしけれハ、かゝるみたれの中にも心をすまし、

あるあした、「中略」藤兵衛尉有則を召具して、「中略」竹生嶋へそまゐられける。「中略」経政、明神の御前について給ひて、「中略」しつかに法施まいらせてゐ給へハ、やうく日くれ、ぬまちの月さし出て、湖上も照わたり、社壇もいよくか、やいて、まことにおもしろかりけれハ、常住の僧、是ハ聞ゆる御事也とて、御琵琶を奉る。

経政是を取て引給ふに、上玄石上の秘曲にハ、宮の中もすミわたり、誠におもしろかりけれハ、明神も感應にたへすやおほしけん、経政の袖の上に、白竜現して見え給へり。経政あまりの忝さに、しはらく御ひはをさしおかせ給ひて、かうそ思ひつ、ける、千はやふる神にいのりのかなへはやるくも色のあらはれにけり。

※出典は平家物語

舞曲

〔東鑑〕二品へ頼朝へ遣_三遥海浜_三給。故一条次郎忠頼之侍、甲斐中四郎秋家、被_レ召_三具_二之。以_三歌舞_一為_レ業之者也。於_三由比浦_一、小笠懸之後、入_三御岡崎四郎宅_一、御酒宴之間、

秋家尽_三舞曲_一。見文治三年七月廿三日記

曲 謫罰の部ニモ入ベシ

太政大臣師長ハ、つかさをとめて、あつまのかたへ流され給ふへ治承三年十一月十七日。「中略」保元のむかしハ、南海土佐へなかされへ歴_三九年_三帰洛へ、治承の今ハ、又関東尾張の国とかや。管弦の道に達し、才芸すくれておハしけれハ、朗月にのそミ、うら風にうそぶき、琵琶をたんし、和歌を詠し、なほさりかてら、月日をおくり給ひけり。ある時、当国第三の宮あつた明神に参詣有て、其夜神明豊樂_{マヤカ}の為に、ひはを弾、朗詠し給ふ所に、「中略」やうく深更に及て、ふかてうの内にハ、花ふんふくのきをふくミ、りうせんの曲の間にハ、月清明のひかりをあらそふ。ねかはくハ、今生世ぞく文字のげう、狂言ききよのあやまりをもつて、といふらうゑいをして、秘曲を引給ひしかハ、神明かんおうにたへずして、宝殿大にしんたうす。平家の悪行なかりせハ、今此瑞さうをハ、いかてかおかむべきとて、大臣かんるいをなかされける。

舞童

〔東鑑〕 宮根児童（等）、依召、去^ル夜參著^ス。是為勤^ニ仕

来月三日鶴岳^ノ舞樂也。童形八人、増寿。宮熊。寿王。

閉房。楠鶴^{ヅス}。陀羅尼。弥勒。伊豆。石丸^ノ等也。於別当坊^ニ

自^ニ今日、へ文治五年二月十二日、始^テ調^フ樂^ヲ。山城介奉^ニ行之^ス。

曲

今ハむかし、放鷹樂といふ樂を、明^{セン}暹^{マヤ}已講、只一人、な

らひつたへたりけり。白河院野行達あさてといひけるに、

山階寺の三面の僧坊にありけるか、こよひ八門なさしそ、

たつぬる人あらんものか、といひてまちけるに、案のこ

とく、入きたる人あり。これをとふに、是季なりといふ。

放鷹樂ならひにかといひけれハ、しかなりとこたふ。す

なハち坊中にいれて、件の樂をつたへけり。

歌曲

宇治拾遺（物語）

正保ノ比世ノ風曲都巡リト云唱歌アリ。其^ニ曰、美津ノ御
牧ノ夕涼、尚程近キ八幡山云々。此曲初二春ヲ云テ、地
主ノ桜ヲ詠シテ、藤ノ社ヲ経テ、此所ニテ、夏ニ遷リ桂
ノ里ニ至テ、秋ヲ云フ也。山城名跡志

琴

初^メ枯野^ノ船^ヲ為^シ塩薪^ノ燒^シ之日、有^ニ餘^ノ燼^モ則^レ奇^ニ其^ヲ
不^モ燼^{タル}而^{シテ}獻^ス之。天皇異^ニ以^テ令^ラ作^ラ造^ラ琴^ヲ。其音鏗鏘而
遠^ク聆^ユ。应神紀^{（一）}

鐘

舒明天皇八年七月己丑朔、大派王、謂^テ豊浦大臣^ニ曰、群
卿及百寮、朝^{モ、ツカサ}參^{ミカト}已^ニ懈^{ミカトマイリタルコト}。自^ニ今以後、卯^ニ始^ニ朝^ニ之、
已^ノ後^ニ退^ニ之。因^テ以^テ鐘^{カネ}為^セ節^{セヨト}。然^ニ大臣不^レ從^ハ。

日本紀

笙

新羅三郎義光ハ、奥州の賊軍以の外驕して、度々勝にの
ると聞及ひ、舍兄義家朝臣の御身の上覚束なく思れけれ
ハ、義光か身の御暇を賜りて、奥へ下り力をも合せ、軍

の様をも見侍りたくこそ候へと、内へも殿下へも度々嘆き申されけれども、当時ハ何事も院へ白河への御沙汰なりけれハ、赦勅免なくて、空しく月日を過されけるが、寛治四年二月下旬、潜に京都を逃れ出、下部二十人はかりを召具して、奥州へそ下られける。その夜の明方に、新羅明神の宝殿に著給ひし程に、ふかく祈誓をこらし、奉幣して坐しける処ニ、楽人豊原時秋といふもの、馳来りぬ。義光朝臣、さてハ院へ白河への御咎ありて、罪せよとの御使やらん、と独胸打驚きて、対面せられけるに、さハなくて、時秋しきりに奥州の供をぞ望ミける。さま／＼賺しこしらへて帰さんとし給ひけれども、時秋さらにしたか（は）ず。抑時秋斯まで義光朝臣に志を傾たることいかなる故と尋るに、時秋か父ハ時元とて、双なき笙の上手なりけり。しかるに時元身まからんとせし時、一子時秋ハいまだ幼少なりけれハ、所伝の秘曲大食調・入調曲の二曲をハ、義光朝臣、芸に長し坐しけるまゝに、伝置てその身むなしくなりぬ。時秋^{アキ}父か家業を継といへ

とも、相承の曲を伝えさる事を悲しミて、常に義光朝臣に従事て他事なく^{フルマヒ}挙動けり。されハ今度、義光朝臣奥州へ下向し給へハ、もしや長き別にもなりなんかと名残もをしく候へハ、この秘曲を受学ずして過なんか、と心うけれハ、はる／＼共に奥へ下りて、時もあらバ伝受けばやと思ひて、斯ハ相くせしとかや。去程に日数経て、足柄山に到ぬ。時秋^{国損}でも更にその事ハ色にも出さ、りしが、義光朝臣、彼が志念の深きを案し給ひ、遂にこの地にて大食・入調の二曲を伝へ、剩時元が自筆の笙譜をとり出て、時秋に附与し給ひければ、時秋ハ年来の所望一時に足て、嬉さ更に譬ふへうもあらず。その夜ハ足柄山に止宿し給ひて、弥生の臘月に彼秘曲を吹すさみ給ひければ、心耳も澄、肝胆に銘していと有かたし。時秋ハ涙を落つ、聞居たりしが、夜明ければ、義光朝臣、是よりかへるへしとて、時秋をハ都へかへし給ひぬ。時秋、絶に奥州までまかり下らんと申けれども、義光朝臣、さま／＼道理を尽してと、められけるゆゑ、時秋ちから及

ばて東西に別れけり。

※前太平記摘要

* (貼紙) 東鑑治承四年十月廿一日、於_三駿河国賀嶋_三武
衡与_三義経_三対面之記云、白河院御宇、永保三年九月。
曾祖陸奥守源朝臣義家、於_三奥州_一与_三將軍三郎武衡・同
四郎家衡等_三、遂_二合戦_一。于_レ時左兵衛尉義光候_三京都_一、伝_三
聞此事、辞_三朝廷警衛之当官_一、解_三置弦袋_一於殿上、潜_二
向奥州_一。加_三于兄陣_一之後、忽被_レ亡_レ敵訖。

笛

高倉の宮ハ、セミをれ・小えだとして、かん竹のふえを二
もち給へり。中にも蟬折ハ、昔鳥羽院の御時、宋朝の御
かどへ沙金をおほく参らつさせ給ひたりしかハ、返報と
思しくて、生たる蟬のごとくに、ふしの付たるふえ竹を
一よ参らつさせ給ひけり。是程のてうほうを、いか、さ
うなうえらせらるへきとて、三井寺の大進の僧寛宗に仰、
たんに立、七日かちしてえらせ給へる御ふえなり。あ
る時高松の中なこん実平卿参て、此ふえをふかれけるに、

よのつねの笛のやうに思ひわすれて、ひざより下におか
れたりけれハ、ふえやとかめけん、其時セミをれにけり。
扱こそ蟬折とハ召れけれ。此宮、ふえの御きりやうたる
によつて御相伝有けるとかや。平家物語

琵琶

仁明天皇の御宇、嘉祥三年三月に、掃部頭貞敏、渡唐の
時、大唐の琵琶の博士廉婕夫にあひ、三曲をつたへて帰
朝せしに、其時玄象・獅丸・青山、三面の琵琶を相伝し
て渡けるが、龍神やをしミ給けん、なミ風あらく立けれ
ハ、し、丸をハ海底にしづめぬ。今二面の琵琶をわたい
て、我朝の御門の御宝とす。村上の聖代応和の比はひ、
三五夜中の新月の色白くさへ、涼風さつ／＼たりし夜な
かハに、帝清涼殿にして玄象をそ遊(さ)れける。時に
かけのこくなる者、御前に参して、ゆうにけたけき声
をもつて、唱歌をめでたく仕る。帝しばらく御ひばをさ
しおかせ給ひて、抑汝ハいかなる者ぞ。いつくより来れ
るぞ、と仰けれハ、こたへ申て云、是ハむかし貞敏に三

曲をつたへ候ひし、大唐のひはのかせ廉婕夫れんせうと申者にて候が、三曲の中に秘曲を一曲のこせるつミによつて魔道へ沈おりん仕る。今君の御はちおと妙に聞え侍る間、参入仕る所也。願ハ此曲を君に授参らせて、仏果ほたいを生すへき由申て、御前に立られたりける青山を取、てんじゆをねちて此曲を君にさつけ奉る。三曲の中に上玄・石上是也。其後ハ君も臣もおそれさせ給ひて、遊し引事もせさせ給ハさりしを、仁和寺の御室の御所へ参らせさせ給ひたりしを、修理太夫経盛の嫡子、皇后宮佐経政十七の年、宇佐へ勅使をうけ給ハつてくたられける其時、青山を給つてうさへ参り、御殿へ向て秘曲を引給へり。平家都落の時、つね政御室へまいりて青山をかへしあつけ奉る。夏山のミネのみどりの木の間より、有明の出けるをはちめんにか、れたりける故にこそ、青山とハ名つけけれ。玄象にも相おとらぬきたいの名物也。あかすして別る、君か名残をハ後のかたミにつ、ミてそおく。これハつね政御いとま乞にまゐりて、ひはをかへしあつけ奉りし時、御

室の遊れたりし御歌也。その時つね政御硯給ハりて、くれ竹の筧の水ハかハれともなをすミあかぬ宮の内哉。此つね政、最愛の公卿たるによつて、先年青山を下し給ハられたりけるとかや。

笛

並 平家物語 摘要

摂津国一の谷のた、かひに、熊谷次郎大夫、敦盛をうつて首をつ、まんとて、よろひ直垂をといて見れハ、錦のふくろに入られたりける笛をぞこしにさ、れたる。あないとをし、此あかつき城のうちにて管弦し給ひつるハ、此人々にてそおハしけり。当時御かたに東国の勢、なん十まんぎか有らめ共、軍のちんにふえもつ人ハよもあらし。上らうハ猶もやさしかりける物をとて、涙をなかしけり。件のふえハ、おほち忠盛笛の上手にて、鳥羽院より下し給られたりしを、経盛相伝せられたりしを、敦盛笛のきりやうたるによつてもたれけるとかや。名をハ小えたとぞ申ける。〔四〕一説に青葉。平家物語

笛

今ハむかし、堀川院の御時、奈良の僧ともをめして、大般若の御読^ミ經おこなはれけるに、明暹^{セン}この中にまゐる。

其時に、主上、御笛をあそはしけるが、やうく調子をかへてふかせ給ひけるに、明暹調子ごとにこゑたがへすあげ、れハ、主上あやしミ給ひて、この僧をめしけれハ、明暹ひさまつきて庭に候。おほせによりて、のほりてすの子に候に、笛やふく、ととハせおはしましけれハ、かたのこつく仕り候、と申けれハ、されハこそ、とて御ふえたびてふかせられけるに、万歳楽をえもいハすふきたりけれハ、御感ありて、やかてその笛をたびてけり。件の笛伝りて、今八幡別当幸清かもとにありとか。へ件笛幸清進^ニ上当今^ニ建保三年也。〱宇治拾遺(物語)

(しばた みつひこ 早稲田大学演劇博物館研究員)

(たにわき まさちか 早稲田大学文学部教授)

(きら すえお 早稲田大学文学部教授)

(はりもと しんいち 大東文化大学教授)

(ふたまた じゅん 明治大学非常勤講師)

(おざわ えりこ 港区立港郷土資料館)

文化財保護調査員)